

「ひと」「もの」への興味・関心を深めよう！！
～コミュニケーション力の向上を目指して～

教科・場面

自立活動

授業・実践のねらい

- ① 周囲の「ひと」「もの」に対して、手を使って探索する力を広げる。
- ② 教師からの呼びかけに対して、目を合わせるなど応じる力を育む。

対象の児童・生徒

高等部3年 Gさん 所属グループ:A

【C類型】 重度重複スコア 要求表出・人間関係
共にI～(II)程度

(Gさんの様子) 【疾患名】てんかん

【身体機能】 右凸側弯がある。脱臼はみられない。

寝返り・起き上がり⇒自立 床座位・四つ這い・膝立ち

⇒見守り(自分でできるが、急なてんかん発作があるため)

【コミュニケーション・社会性】

名前を呼ばれるなど、音の鳴る方向に顔や視線をむけることは、ほとんどみられない。(ちら見程度はある。)また、教員の声かけに応じるように声をだすこともみられない。手を使っての探索動作も少ない。覚醒・情緒面の浮き沈みの幅も大きく、自分の手やタオルを口に入れる動作やうつ伏せ・膝立ち姿勢から上体を興奮しながら上下に動かすなど、前庭刺激を求める自己刺激行動を頻繁に行う。自己刺激行動を行っていないときには寝ていることも多い。また、不快・不安なときには自分で耳の穴を手で塞ぐなど外からの刺激をシャットアウトしていることがある。

教材・教具

・ハンドマッサージャー



スイッチを入れると、振動するだけでなく底が赤く光る。振動刺激(固有覚)や光刺激により生徒の興味を引き付けやすく、手を口を持って行くことが多い生徒や常同行動が多い生徒に対して手からの感触をじっくり感じてもらうことや手の探索動作や追視動作を引き出すことに有効。

・人工芝



手からの感触をじっくり感じてもらうことに有効。刺激に気づき、探索的に手を動かして探るようになり、繰り返して触ろうとすることで外界へ興味をもてるようになり、手への意識を高めながら手を使って遊んでいく学習につなげていく。

・ファシリテーションボール



ファシリテーションボールに仰向け・うつ伏せ・座位など様々な姿勢でのることで触圧、揺れ、重力に対して適切な感覚を入力して、心身のリラクゼーションを促し、感覚運動機能の向上・情緒の安定・対人関係の改善を図ることに効果がある。

工夫したところ

- ・本人が感覚をしっかりと感じ取っているかを確認しながら行うこと。教材に意識を集中しやすいように、声掛けを最小限にするなど他の感覚刺激の量を調整する。
- ・少しずつ教材を提示する位置を適度に変化させながら、探索活動、手や目の動きを促していく。

授業展開・教材の使い方など

① 情緒・覚醒を安定させ、手や目を使って教材にむかえるように、感覚要求(①前庭感覚:動いて揺れを感じたい!②固有感覚:触圧・振動など心地良い感覚感じながら、ボディイメージを確かめたい!)を満たす。

⇒上体を上下に動かすなど前庭感覚を求める自己刺激行動ができるように、ファシリテーションボールにうつ伏せに乗る。この時、右凸になっている体幹を真っすぐになるように支援する。本人の背部全体に支援者が覆うように乗り、触圧の感覚(固有感覚)を感じさせる。固有感覚を感じさせながら少しずつ、上体を上下に動かすような自己刺激行動を抑制していく。(情緒・覚醒が安定していること、無理に自己刺激行動を止めないことが大切。)

② 本人を車椅子に乗せ、教材への探索活動が行いやすいように車椅子に天板をつける。

③ 本人の好きな感覚を感じられる教材(人工芝・ハンドマッサージャー・(光る棒)など)を本人の前に提示する本人の手に教材を少し触れるように提示しながら手の探索活動を促す。

(教材に注意が向くよう本人への声かけは最小限。)

授業を通じた児童・生徒の変容

- ・自己刺激行動が少しずつ少なくなるとともに、周囲の「ひと」「もの」に対して、自分の手を使っての探索活動が明らかに増えた。提示された教材・教具からの声かけに対して注視することも増えてきた。
- ・覚醒、情緒が安定してきたことにより、授業中も起きて活動する時間が増えてきた。
- ・トイレなど介助場面での協力動作が増えてきた。